

授業改善の試みと実践的検討 —メリトクラシー克服、全面発達の視点で—

森下 博*

要約

本学の紀要論文で、筆者は「ゼミ生と考える基礎学力の養成」(7号)、「短大生に必要な基礎学力とは何か」(8号)、「学生参加の必要性と民主的人格形成」(10号)を発表した。また、10号の副題として「学校・教育・人格形成はだれのためのものか」について問題提起をしたが、課題が残った。それは、メリトクラシーの克服と全面発達の理念、とりわけ民主的人格の形成との関連について、明らかにすることであった。今回の小論では、その課題に加えて、筆者が関わった3年間のFD活動を生かして、筆者自身が授業改善に挑戦し、学生の感想文をもとに実践的検討を試みた。

第1章は、授業改善にとって欠かせない教職員の論議と合意形成について述べた。第2章は、メリトクラシー克服と全面発達の理念の視点から見たわが国の教育改革、授業改善の問題点を明らかにした。第3章は、筆者の授業改善の試みを実践的に検討した。

本学卒業生が実践研究集で発表した納豆集団の発想は、授業改善にとって全学的な論議の参考になるのではないか。教職員・学生の論議を待ちたい。

キーワード：メリトクラシー、全面発達、人間の尊厳、学力テスト、FD活動

2011年9月30日受理(教育研究)

はじめに

憲法改正への動きも予断を許さない時代に入っている。2011年秋、大阪「維新の会」が「教育基本条例案」を議会に提出。学力テスト結果公表、君が代不起立教員の免職などを明記、知事が教育介入できる内容となっている。

筆者は、前回の小論文で、国家の教育権が公然と主張されはじめていること。文部科学省は、今日の教育問題について、原因分析どころかその総括すら行わず、OECDのPISA学力テストの成績向上を第一義とした教育改革を推進していることを批判してきた。¹

全面発達の理念である「人間らしさ」を実現するには、今の能力主義・メリトクラシーの克服、つまり、「資本の論理」から「教育の論理」に軸足を移す社会を

めざす以外に子どもを救うことはできない。

「がんばればだれでもが豊か」というメリトクラシーな社会から、「一人ひとりを人間として大事にし、子どもたち同士がつながっていける関係づくりを大切」にする社会をめざすことが非常に重要な課題となっている。今、なぜメリトクラシーの克服なのか、今、なぜ全面発達の理念なのか、を明らかにすることが今回の小論の重要なテーマである。また、前回からの課題²でもあった。

今回の小論では、その課題に加えて、筆者が関わった3年間のファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development = 以下、FDと略して使用)活動の結果から学んだことを生かし、筆者自身が授業改善に新たな挑戦を試みた結果を、学生の感想文をもと

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：森下 博

〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8

大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

E-mail: h.morishita@kenko-fukushi.ac.jp

に実践的検討を行なったものである。なぜ、教育改善の試みと実践的検討に取り組んだか。「資本の論理」とりわけ弱肉強食の社会、強者が幅をきかせる社会にあって、子どもたちが自己疎外に苦しめられている現状から人間の心を取り戻す「教育の論理」に立った授業改善を試みることはきわめて大切な課題だと考えたからである。

第1章 授業改善に必要な、教職員の論議と合意形成

第1節 FD活動は、学生の実態把握の議論から

本学では、2009年にFD委員会を立ち上げ、本格的な授業改善にとりくんできた。

学生の実態把握の問題から、学習意欲や専門性を高めるための授業のあり方について議論し、その結果を第三者評価委員会にも報告³してきたところである。中でも、私語の問題は、関心の高い課題でありながら、議論を深めることができなかった。

全国の大学におけるFD活動の設立と役割・導入の背景などを調べてみると、結局はわが国の教育改革の一環として、財界の思惑も絡みながら、トップダウンで義務化され今日に至っていることがわかる。わが国のFD活動義務化の是非はともかく、多くの大学で学生の学習意欲の低さが課題になっていることは事実である。

学生間の格差の問題をはじめ今日の学生の実態をどうとらえ、どう議論していくかは今後の重要な課題ともなっている。学生の実態をどのようにとらえるかは、「教師のパフォーマンス」の中で、児島の見解⁴が興味深い。ただし、筆者と児島とは、児島の書物を読む限り、教育に対する考え方は全く立場を異にするといつてよい。そのことを前提に、「実態のとらえかた」について、彼の考え方を紹介する。

彼は、実態について大きくは二つの課題があるとして、一つは「同じ子どもをとらえても、A先生は、プラス評価し、B先生はマイナス評価をする。…実態把握にはある価値性が反映される。そこに、他の組織体にみられないやっかいな面がある」という。

二つ目の課題として、児島は「行動や現象の『観察』をもって、実態だとしている点」や「数量的な調査データを並べたと」しても「『だから、どうなんですか』と言いたい…現象の観察だけでは、教育は始まらない」と、実態把握の問題性を指摘している。

彼によれば、「なぜそのような行動の特性や現象を

示したのかという『解釈』、その解釈に基づいて何らかの指導を加えるべきかどうかの『診断』、いかなる方向性をとり、いかなる手立てをとるのかという『処遇』といった一連の手続きがあって、初めて、実態を把握したことになる」と結論付けている。そして、児島は「『うちの子は耐える力がない』となげいていては、教育の専門家とはいいいがたい」と、厳しい指摘をしているのである。本学でも、学生の実態把握の議論は今後の課題といえる。

第2節 小論「私語は生きる力かも」のもつ重要な意味

前回の小論で、筆者は本学学生の実態把握について、学生をどうとらえるかについて私見⁵を述べた。

本学学生の実態把握や実習及び就職活動をめぐって、指導が「甘すぎる」「もっときびしく」などの意見を耳にすることがある。時には、保育現場や卒業生からも聞くことがある。確かに、学生の実態をよとする教職員はおそらくいないはずである。

実態把握についての意見は、会議の席上ではなく、あくまでも個人的な声として聞くことが多い。児島に言わせれば、教職員が個人的につぶやく愚痴は、現象であって実態とはいわないというのである。本学学長である秋葉は、「私語は生きる力かも」という小論⁶を発表している。

非常に興味深い。秋葉は「大学のこれからを考えると学生の実態を把握すべく講義を担当しています。その最初に時間に驚いたというより、ただただ、教室で展開する学生模様を見入ってしまいました。わずか70名前後の学生たち、前列から3～4列目までは、筆者の驚きの表情をジーっとみつめています。その後列は、さまざまな動きを示しつつも、受講態度なるものの証しすらなく、私語、私語の陽気な若者群像でした」と、最初の講義の様子を述べている。普段どおりの様子をこれだけ率直に紹介することはなかなか出来ないのが教師である。続けて、「筆者は、役割故、声高に怒ることはできません。さりとして、この私語の状況を放置するわけにもまいりません。そこで筆者のとした態度は、私語が止まむまで待つ、ということでした。しかし、待つこと、それはそれは長い。それでも待つ。こらえきれなくなって、『そろそろ、話してもいいですか』、といいながら教卓をたたきました。こんなことを繰り返しながら一、二回の講義を終えました」と続いている。

秋葉は、「こうした現象が起こる背景を探り出さね

ばとおもうようになりました。世代間の断絶なのか、講義に工夫がないのか。…プライドが傷つけられる局面をいやというほど経験する中で、「イヤ」と叫び続けてきた証しこそが私語なる現象であったのです。筆者は、こう分析したうえで、彼らにプライドをもってもらうための教育実践のありようを模索し、今日に至っています」と述べている。

筆者は、この小論を非常に関心をもって受け止めた。その理由の第1は、普段どおりの教室の様子を率直に紹介していることである。第2は、学生の否定的に見える現象を学生のみinnで群れる知恵の一つとして肯定的に分析していること。決して、教師の力量にだけに目をむけていないこと。第3は、「彼らにプライドをもってもらうため」と、人間を育てる視点をはっきりさせて指導している点である。そして、最後に「教育実践のありようを模索している」と結んでいる点である。筆者は、私語や受講態度の問題について、これだけ、はっきりと実態について書かれている論文を見たことがない。学内での授業改善の論議を進める上で、貴重な問題提起かもしれない。まさに、これが兎島のいう実態把握をさしているのではないだろうか。

第3節 教諭出身教員の講義が学生に歓迎されるのは

大学生の受講態度に対する実態の把握の問題で、元中学校教諭で、現在、国立大学の非常勤講師をしている金子は第61次大教組教研レジュメ⁷に次のようなことを書いている。金子が学生の反応に関していくつかの驚きがあったと、

「授業そのものに対しての学生の反応である。『大学の講義でもこのようなものがあつたのか』『ひさしぶりに集中して話を聞くことができた』などの反応である。特別なことは何もしていないつもりであつたが、いったいこの反応は何なのだろうか」と、書いている。

金子は「ある教育系大学の教授が『大学の教官たちには、教育論というものがない』という事を述べられていた。そんな難しいことは置いておくとして、学生たちは大学の講義では感じられない何かを受け止めてもらっている事は確かである」と続けている。

そして、彼は「中学校の現場では、子どもたちのおしゃべりが多く、授業に集中しないというのは普通であり、そんなにめずらしいことではない。教師は、そのような子ども達に、興味や関心をどのようにして向けさせるか、学習意欲をどうやって引き出すかを常に工夫している」と述べているのである。そして、「大学

の講義らしからぬ講義」という見出しの感想文を紹介している。

「実際の授業を体験させる取組みが面白かった。大学の講義らしからぬ講義であつて、金子先生がわたしたちを『クラス』として考え、授業をし、上手くのせていった。その手法自体がとても興味深かつた。なぜなら、私たちは、授業を実際にやってみる（テストの回答を用いて言えば『なすことによって学ぶ』）ことによって、こんなに反応の良い皆を前にしてもなかなか授業を上手く進めることが難しいことを知つたからだ。最後には、確かにこの『クラス』の中に『クラス』としての空気ができていた。自分たちがやつた授業に関して、班のみinnなどは『おくる言葉』をテーマとして、対話によって個性はつくれるのだということメッセージにした授業を行なつたが、授業後の感想では、思いもよらなかつた点をみんながほめてくれ（いままでの授業を想起させるポイントが各所にあつてよかつた、など）まさに授業のメッセージを自分でもたけけんすることとなつて、なかなか愉快であつた」と面白かつた授業の風景が浮かんでくる。

金子は、中学校の現場では、「おしゃべりや授業に集中しない」というのは普通でめずらしいことではない、と述べている。つまり、教師が上から目線で子どもを見ず、子どもの現状から出発して、「子ども達に、興味や関心をどのようにして向けさせるか、学習意欲をどうやって引き出すか」を常に工夫していると書いている。金子が試行錯誤のなかで、工夫の積み重ねが、受講生たちに「上手くのせていった。その手法自体がとても興味深かつた」と言わせているのである。長年の蓄積で「手法のノウハウ」の引き出しを数多く持っていることが学生に歓迎される要因かもしれない。ここにも授業改善のヒントがあるようだ。

第2章 全面発達の理念とメリトクラシー克服の視点から見た授業改善

第1節 全面発達の理念を今、つかみなおすことの意義

まず、全面発達とはいかなる概念か、なぜ、今、授業改善にとって重要なのかについて考えたい。

まず、日本大百科全書（小学館）によると、全面発達論は「知的労働と肉体労働を結合する教育によって、青少年の精神的、身体的な諸力の全面的発達を目ざす社会主義、共産主義社会において教育の根本目的として重視されている。…階級対立と古い分業を残す資本

主義社会では、その実現が制約されること、そして社会主義社会において初めて全面発達が可能になることを主張し、総合技術教育（ポリテフニズム）の必要性を強調した」と書かれている。

今、なぜ、全面発達なのか。その概念を考えるには、まず、エンゲルスの「イギリスの労働者階級の状態」についての論文にさかのぼる必要がある。それは、この著作に書かれている内容が、わが国の青年を含む労働者の貧困と非人間的な扱いをされている労働者の状態と酷似しているからである。

「イギリスの労働者階級の状態」を解説している浜林⁸によると、「エンゲルスは大都市における労働者の生活環境と、労働者の労働条件や生活環境を悪化させる原因となっている労働者相互間の競争とをえがいてきた」。その結果を、「労働者の肉体におよぼす影響、その精神におよぼす影響、そして労働者の階級的自覚という3点にまとめられる」として、ブルジョア階級および国家が労働者にたいする教育をいっさいおこなわず、こうした状態を放置し、かつ、何の楽しみもない生活をしいられていれば、「労働者が飲酒とセックスという二つの享楽に溺れ、あるいは労働者のあいだで犯罪が増加しているもの当然」と解説のなかで述べている。

そして、浜林は「とりわけエンゲルスが指摘しているのは、ほんらい人間にとって喜びであるべき労働が、強制によっておこなわれるときには最大の苦痛となるということである。…労働の自己疎外作用によって、労働者はますます『動物化』していくのである」と、精神と肉体の分離、労働の自己疎外と人間に及ぼす影響について書いている。

非人道的な諸結果にたいしてエンゲルスが「労働者階級は、支配者にたいして怒りを感じているあいだけ人間なのである」と述べているが、まさにその通りである。

このエンゲルスの指摘は、わが国における今日の青年や労働者の貧困な暮らしと、どこかダブル部分が多いように思われる。全面発達の理念は、自己疎外によって動物化していく労働者を、人間として扱わせるために肉体と精神の結合を要求したところから生まれたものである。つまり全面発達とは「人間的すばらしさ」に気づき、働く喜びや学ぶ喜びをわがものとする理念として生まれたともいえる。

とするならば、秋葉が本学学生の私語現象を「プラ

イドが傷つけられる局面をいやというほど経験する中で、『イヤ』と叫び続けてきた証し」と述べ、金子が中学校では「私語や集中力のなさは普通」という子どもたちの状況は、わが国の人間無視・自己疎外の教育の反映であり、「イヤ」という人間的な言動として捉えられないだろうか。

わが国の教育改革を「誰のための学校・教育・人格形成か」の視点に立って厳しく問い直し、私語をはじめとする授業改善の課題についても民主的人格の形成と全面発達の要求と関連付けて実践することが、重要である。今回の小論をまとめた意義もこの点にある。**第2節 メリトクラシー克服とは「資本の論理」から「教育の論理」に、軸足を移すこと**

荒木穂積は、「能力とメリトクラシー」の中で「私たちのねがいは、重度の障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということ認めあえる社会をつくらうということです」⁹と、糸賀一雄の考え方を紹介している。「立派な生産者である」とはどういうことか。重度の障害をもったこの子たちも、その存在自身がまわりの人間を変えていく存在という意味で「立派な生産者である」ととらえる考え方である。介護をされているだけの存在ではないということである。生きている人間はそれ自体が尊いという意味もこの発想からきているように思える。

では、メリトクラシーとはなにか、広辞苑のよると、「人間の評価は、身分・家柄などではなく本人の知能・努力・業績によるべきだとする考え方。また、そのような考え方に立つ社会」である。

荒木によると「メリトクラシー (meritocracy) とは、貴族による支配 (aristocracy) や富豪による支配 (plutocracy) になぞらえてメリトつまり能力のある人々による支配が確立する社会のことをいう」と説明している。また、小玉重夫¹⁰は、「学力とメリトクラシー」の中で、「学校での学力の形成をあたえている原理はメリトクラシーである」と述べ、「近代的メリトクラシーは、『がんばればみんなできる』という『能力＝平等主義』に支えられて、人材の地位配分の機能と、国民国家における社会的統合の機能という、両方の機能を同時に担ってきた」という。

小玉は、「がんばればみんなできる」というメリトクラシーの役割が揺らぎはじめたのは「欧米では1970年代前半、日本でも、1990年代以降の高度成長の終焉とグローバル化の拡大」によるという。小玉は

わが日本の教育改革が、このメリトクラシーの社会的統合機能の揺らぎに対する対応だと述べている。非常に興味深い分析だが、ここではその結論のみ紹介しておく。

小玉はメリトクラシー克服のための教育改革については、「2007年から始まった全国学力調査は、主体の自由な遂行性（パフォーマンス）を媒介とした間接的な新しい国家統制への道を開いた。（…略…）今日の学力政策を、新しい国家統制ではなく、格差社会の構造転換を促す福祉国家の再定義へと組み替えていく可能性も存在している」と結論づけている。

この考え方は「資本の論理」である支配の構造を根本的には変えない新たな支配形態といえる。

小玉が今回の論文を発表するずっと以前に、矢川徳光¹¹が次のような主張をしている。「真の意味での全面発達の実現」について、「階級闘争をとおしての労働者階級の解放という見とおしを基本的要因としてふくまない全面発達なるものは、「福祉社会」ないし「福祉国家」的未来の中で実現するというのは小ブルジョアジエ的インテリゲンチヤの教育的幻想にすぎない」と書いている。小玉の論文に対する厳しく反論ともとれる内容である。

齊藤¹²は、「わが国の教育改革は、全面発達がめざす『人間を人間らしく』育てることを目的にするのではなく、『資本の利益』を最優先に子どもと教育を作り変えるところにその根本の目的があるということである」と述べている。また、土屋基規¹³は、階級教育の結果として、「学力低下、非行の増大など深刻な教育の荒廃をもたらし、子どもの人間的な能力の全面発達と民主的人格の形成を求める国民の教育要求とのあいだに鋭い対立・矛盾を深化させる」と述べている。

自己疎外によって動物化していく自分を、自分が人間であることに気付き、人間的発達を望むなら、「人間を見失わせる」社会的な力と闘う以外にはない。これが矢川の主張でもある。つまり、資本の支配から解放される見通しをもたなければ全面発達の実現はないし、メリトクラシー社会の克服もありえないということである。

わが国のように、人間を見失わせる社会的な力の強い国では、「能力主義」と闘うことによって、人間が人間らしく生きたいと願う社会を実現することはできるのである。

こうした社会を実現してこそ、この節の最初に述べ

た荒木のいう「重度の障害児たちも『立派な生産者である』という社会」が実現できる。また、言い換えれば、全面発達を阻害する「資本の論理」から人間の無限の可能性を引き出す「教育の論理」に、軸足を移すことができるのである。

第3節 フィンランド教育と全面発達の理念

わが国のPISAテストを意識した学習指導要領と全国学力テストが、学校現場の実践にさまざまな影響を及ぼしている。前節で小玉が分析した近代メリトクラシーの揺らぎの「克服」は、わが国では非常に危惧する方向で「改革」がすすめられている。実際の学校現場ではどのように進んできているのだろうか。教育改革、とりわけ、学力向上をめざす先進的な実践を特集している、月刊雑誌にその特徴が読み取れる。

例えば、授業力アップ「授業研究21」¹⁴の1月号は「全国学力テストは現場を変えるか」で、10月号の特集では「習得と活用をつなぐ授業づくり」について、それぞれ特集が組まれている。

10月号には、全国学力テストの各論に関する「特集」である。

「PISA型読解力の温故知新」というテーマで「活用の背景にはPISAショックがある」として、結論は「だから、『活用力』を学習指導に取り入れるようになった大きなきっかけはPISAテストと考えてよい」と、今回の教育改革がPISAテストの成績を上げるためであることがこの小論でよくわかる見解となっている。

また、「活用力は学習を転移させる力である」というテーマの論文を読むと、「B問題に類似した問題を解く練習をすると、『活用力』は高まるのか。高まるとは言えないのか。スリリングな問いであるとして、「練習をすれば、B問題に類似した問題の正答率は上がる。ある程度、上がる。しかし、それは現実的な活用力の向上とはいえない」と持論を述べている。

また、「活用力は練習によって身につく」をテーマにした論文では、「テキストで知識を学び、それを幾度か練習して技能を身につける」そうすることで活用力が高まるのだ、とPISA型テスト「活用型」向上のための実践的検討に終始している内容であった。いかにもフィンランドの学力に追いつけ、追い越せのテスト至上主義の実践が学校でとりくまれていることがよくわかる。

ところで、フィンランドの国民や訪問した研究者はPISA世界一のフィンランドについてどう見ているの

であろうか。

ペトリ・ニエメラ¹⁵は「PISAの不思議とフィンランド社会」の中で、PISAのテストで1位になったフィンランド人は、とまどっている、次のように書いている。「なぜ、フィンランドの若者たちは、全世界を規模にするテストで1位になったのか。1位になるための特別なことは何もやっていないのに」と述べ、わが国の教育改革の目玉であるテスト至上主義とはかなり違う学力のとらえ方であることがわかる。

フィンランドを訪問した庄井良信は「コラボレーションの発達援助学」¹⁶のなかで、高い学力は「安心と共同」の学びからとして、高い学力の要因をいくつかあげている。その中から2つ紹介する。1つ目は、教育における「公正と平等」の実現こそが、つねに最優先の課題とされてきたとして、フィンランドが生徒間、学校間、家庭環境などの違いによる学力の格差が少ないこと。2つ目は穏健な社会構成主義の学習理論を背景に「学習者第一主義の原理を貫いている。これは、学びの主人公は何よりもまず子ども自身だ、という大きな前提に立ち、教師の役割は、一人の独立した人格である子どもを、対話をとおして理解・支援することにあるという考え方である」と分析している。

筆者は前回の小論のなかで、OECDの調査について、先進面とその限界について触れた。それと同趣旨かどうかは別にして、田中孝彦¹⁷は「フィンランドの教育を美化するだけではなく」のなかで、次のように、問題点を指摘している。フィンランド社会の内部にいる研究者のラヘルマの講演を引用して「学校における根強く存在する『教師中心主義』的傾向に対して子どもたちが発している不満の声、女性の社会進出とその不徹底が及ぼしている複雑な影響、『新自由主義』の広がりが生み出している新たな問題など、社会と教育の現実をリアルに検討しようとする。さらに、そうした問題を克服しようとしているフィンランドの人々の実践的・理論的模索をいねいに知ろうとすること」を紹介している。フィンランドもわが国と同様の「資本」と「教育」の論理、支配と被支配の闘いがあることを物語っている。

第3章 授業改善に必要な実践的・理論的模索

第1節 受講してよかったと実感できる講義の要素とは

従来から、1科目でも1講義でも、1人の学生でもいいから、講義を受講してよかったと実感できる講義

を心がけてきた。しかし、その一方で、わが国の効率主義・能力主義の影響を受け自己疎外を受けてきた学生も少なくない。

本学に入学した学生たちが、「この短大でよかった」とか「受講してよかった」と、実感できる実践を作り出したいものである。そのためには、筆者のいままでの講義を実践的・理論的に検討し、「よい授業」の要素とは何かを明らかにしたい。

よい授業とはどんな授業か。前回の筆者の小論で紹介した11項目の学生作成アンケートの結果¹⁸がある。筆者は、本学教員になる以前は、3つの大学と1つの看護系専門学校、合わせて4校で非常勤講師を経験してきた。講義に対する学生の反応は、どの大学でも概ね好評だった。

ここでは、公立大の学生の感想文を紹介・検討したい。受講生は70余名で毎回学生の感想文を印刷し、全員に配布していた。感想文から、受講生から何が学生の心をとらえたのかを感想文から読み取ってみた。

一人目の学生の感想文である。

「教育学をとろうと思ったのは、先輩の感想文がすごく『よかった』という意見が多くて、そんなにいい授業なら受けてみよう、と思った…講義を受けていくうちに、少しずつ自分が変化しているような（本当に少しなのですが）、そんな気がしました。…誇張ではなく、この授業を受けることができ、めっちゃよかったです」と書いてあった。

受講科目を選択する際、学生は先輩のうわさを参考にすることが多いようだ。この学生もその一人である。この学生は「自分が変化している気がする」と「よかった」理由に書いている。

次の学生は、「今日は徹夜だったので、先生のせいかくの最後の講義だったにもかかわらず、ところどころで意識が途切れてしまったのがくやしかったです。先生の講義はとてもすばらしくて毎回とても楽しみにしていました。時には理解が追いつかないこともありましたが・（笑）授業が楽しみなんてことは今まで考えられないことだったので、正直私自身不思議におもいます。やはり先生には何かすごい力、引力みたいなものがあるのでしょうか。14回の講義、本当にありがとうございました」と、「授業が楽しみなんてことは今まで考えられないし、私自身でも不思議だ」と書いている。なにが「楽しかった」「良かったか」次の感想をみよう。

「森下先生の講義を受けることができて本当によかったと思います。教育学を通して様々なことを学びました。その中でも、私は両親や友達、そして、今までに出会ってきた人々への感謝の気持ちをより強く気付くことができました。今後の人生の中でいままでに経験したことがない苦しいことがあるかもしれません。しかし、そんな時は前に進むだけではなく、一度立ち止まり、今までの自分で積み重ねてきたものを見つめ直してみたいと思います。そして、何とんでも先生の言葉を思い出し、どんな事にも乗りこえ行きたいです。感想の中に出会いを大切にしたいとあったように、先生との出会いを大切にしたいです。本当にありがとうございました」

「教育学の授業では毎回みんなの感想を見ることができ、同級生なのに、こんな深いことも考えるんだ、とかこんな体験をしてたんだ、などいろいろな姿を知ることができ、とても「ため」になりました。前期しかない教育学でしたが、とても楽しかったです」と。

これらの感想文から、よかった講義の理由をあげると、“人々への感謝の気持ちに気付くことができた”、“1度立ち止まり、今までの自分見つめ直すことができた”、“どんな事にも乗りこえ行きたい”、“毎回みんなの感想から同級生の考え方や体験などいろいろな姿を知ることができ、『ため』になった”などが、よかった理由としてあげられている。次の感想文は、体験を思い出し、講義が“自分を成長させた”と書いている。

「私は3人姉妹の真ん中です。姉も妹も反抗期はなく、穏やかでしたが、私は親からすると一番手のかかる子でした。『お母さんが私のこと嫌いって知ってるよ!』と言ったら、初めて頬をたたかれて「そんな事思った時一回もない!」と言われました。受験の時もすごく苦労させました。親って大変。今では親孝行しようと努力しています。親はいつまでも私の港なんだから、感想読んだり、先生の話聞いて思いました。…先生の授業、本当に自分を成長させるための教育学という感じでした。…本当に、本当に、本当にありがとうございました」

「…立派な看護師になった時また先生に会って自分の成長を見てもらいたいと思っています」と、自分の未来と関連付けて書いている。

講義を通じて、学生のなかにある「人間として心」をどれだけ引き出せたか。講義によって、自分を振り返る時間を確保できたか。その結果、自分自身のよさを

を発見できたことが、学生にとって、受講してよかった理由や要素になっているように感じる。以上が、感想文をもとに検討・考察した結果である。

本学のFD委員会が、2008年に実施した「学生作成」による「授業改善アンケート」の結果を見直してみた。そのなかで、学生にとって「よい授業」とは、というまとめがある。それをみると、ほとんどが該当していたことに、筆者自身も驚いた発見である。

ところが、同じ科目名で、同じ科目内容の講義をしたつもりでも、本学短大の前身である大阪保育専門学校や本学の子ども福祉学科の学生には、通用しないのである。いったいどこにこの違いがあるのだろうか。

本学には、秋葉の指摘どおり「プライドが傷つけられる局面をいやというほど経験」した学生が多かったのかもしれない。本学学生との講義内容を思い出し、感想文をもとに検討を試みた。

講義のなかでも忘れられない1コマがある。受講者数約70名、「人間理解Ⅱ」の科目である。第2回目の講義で、学生の感動を引き出す講義を体験することができたのである。テーマは家族についてである。その時の感想文を紹介する。

「今日の授業も内容が濃くて、すごく良い授業やなあ。と改めて思いました。他の授業では学べない事が森下先生の授業で学べるので、先生の授業、好きになりそうです。みんなの感想文、なかなか素直になれない気持ちや普段では分からない友だちの一面が見られたり、同感できる部分があったりと、みんなの意見、自分の意見をてらし合わせてみてよかったなと思いました。…」

「今日の授業はとても貴重な時間でした。遺書の内容を聞いてすごく考えさせられました。私は他人に甘えて頼りまくって生きているのだと気付きました。小さなことにクヨクヨしたり、グチをこぼしたりしていました。だけど森下先生の亡くなった友人は若いうちに病気がわかり仕事も失なったにもかかわらず人のお金を貯めて寄付したり、周りの人に感謝の気持ちを持ち続けていて、素晴らしい人だなあと感動しました。森下先生は、こんな素晴らしい人と知り合いになれて幸せですね。私は、今日、森下先生の授業を受けることができて、とても幸せです。今日の遺書の内容で一番心にひびいたのが、『苦しみの中で、幸せをみつける』という言葉です。忘れないように、メモをとっておきました。私達のために遺書を読んでくだ

さって、ありがとうございました」。

1度でもいいから本学学生を集中させ、感動させる講義をしたいと思ったことが実現したのである。亡くなった友人が筆者に宛てた遺書は、ご家族の了解を得て、学生に紹介したものである。

この講義は、約70名の学生を最後まで何とか大崩れすることなく終了することができた。この事実は新しい発見であり励まされた。何が、学生の心をとらえたのだろうかを考えた。もちろん、筆者自身が必死に友の遺書が発するメッセージを学生に伝えたいという真剣な思いがあったことがあげられる。

しかし、感想文から読みとれる最大の理由は、遺書を書いた友人の人として必死な生きざまがあったからだ。40数年の闘病生活の上に、僅かな収入からお金をまずしい子ども達のためにコツコツと貯め、60歳で100万円という目標をたて、それを達成した。その全額を寄付をしていた事実が学生の心を打ったのではないだろうか。しかも、学生自身の生き方と重ね合わせ、自分を見直す機会となっていることも、大きかったといえる。

次に、14回を通じて、学生の認識を変えることができた講義がある。それが算数教育である。その理由について検討した。受講生のほとんどが、大学に来るまでに苦手な嫌いな科目の1つになっている。一瞬でもいい、1人でもいい「算数って面白いな」と感じてもらえたらと願ってとりくんだ。グループワークを基本にした。前半は、算数教育が保育士に必要な「環境」の一部であることを指導した。中盤には「博士の愛した数式」のDVDを見せてからは、ゲーム感覚を切り口にシラバスに沿って講義を続けた。最終回の感想文である。

「最初、講義を選択するときは『難しそうだなあ〜』と正直思った。それは私自身が算数というのに対して苦手意識を持っているからだ。様々な遊びをいかにして『数学的見地』から解きほぐしていくのか？そして、理論化していくのかが、とてもおもしろかった。算数や数学はただ単に『数』というものを解いていくのではなく、ものの見方や考え方を多角的に見るということであることが分かった」と書いている。

この学生にとって、算数に対する先入観や苦手意識を、発想を転換することによって、意外性や新しい発見があったからではないだろうか。

次の学生は、数学が好きになれたことは、私の人生

での大きな変化だと、次のように書いている。その内容は「私は数学という素晴らしいものから逃げていた生活を送ってきたことを後悔しました。それからの授業は知りたい、解けるようになりたいとわくわくしながら受けました。物の見方やとらえ方が変わるだけでこんなに授業が楽しくなるのだと知りました。この授業で数学を好きになれたことは私の人生での大きな変化だと思います。何かをしなければならないという義務感から、何事も違う見方にすれば楽しく実りのあるものになるのだと知れました」。

他の学生の感想文は、いくつか見出しのみで紹介することにする。

「小学校くらいの時にこんな授業やったら算数好きやったかも」「算数が楽しい授業なんだと初めて思いました」「嫌な数学を楽しくできてよかった」「授業終わった後の達成感・やりとげた感じはどの授業よりも」「オイラーや数学を学ぶ人たち、数学の歴史を知ることができた」「オイラーやガウスの公式（シグマ）、計算への楽しさわかった」「1人でも多くの子ども達に算数の楽しさを伝えられるように」「グループで取り組めて算数を楽しく考えることができた」「自由な発想と考えを持つための授業なのでは」「算数ってすごいな・1つの解き方だけでなく、もう1つの解き方も」と、感想はそれぞれ、バラエティにとんだ内容となっている。

以上の感想文から、学生の講義に対する前向きな反応についてみてきた。もちろん、この講義で、私語や携帯使用がなかったわけではない。しかし、学生たちは講義を通じて、算数に対する苦手意識を払拭し「自分は算数できるかも」と自分自身の再発見につながっていたようだ。好意的に受講できた理由がそこにあったのではないだろうか。

非常勤時代の講義や本学学生の講義を振りかえって、学生が受講してよかった講義の要因について検討してきた。

しかし、全学的な教育課程から考えると、1つの講義は全体のなかの1コマである。非常勤講師時代の時もそうであったが、筆者も大学全体の教育課程とは関わりなく講義を進めていたことは否定できない。

担当科目の講義の評価とともに、大学としてトータルに講義を見ていくことも重要である。筆者の担当科目の1コマの講義がどんな役割を果たしているのか、学生にどんな力をつける必要があるのかと問われ

ば、非常に不確実で、自信がもてない。

次の節では、今年度前期で担当した「教職論」の講義について報告したい。付加価値についても意識しながら、今までとは違った発想での授業に挑戦したつもりである。頭を打つ事も多かったが、その点も含めて検証したい。

第2節 大学生らしい学びに挑戦、付加価値を意識した授業改善

「教職論」の講義を通して、自ら課題を見つけ、解決していける大学生らしい学びを体験させたいと考えた。昨年「教職論」で使用したテキストを参考に、大村はまの著作¹⁹を何冊か読み直し、以下、3点を授業の自己点検ポイントにした。

1. 勉強しても“学ぶ喜びを”知らないでは困る。
2. 「問題解決学習」—自分で課題を見つけ調べる。
学生が調べたい・まとめたい・考えたいと思う「導入」を。
3. 付加価値（岡本定夫²⁰の訪問調査）を意識する。

特に、上記1、2については、以下カッコのなかに明示した。学生に自発学習を進める上で、必要な「大学の学びについての考え方」と、自発学習に欠かせない「ノート使用法」、それに「よいレポートの作り方」について、ていねいに指導した。単位認定についての配点も明示し、この講義の重点と努力目標が学生にわかるよう明示した。

当初は、個別指導の時間をできるだけ確保するように考えていたが、実際は1時間程度しか確保できず、中途半端な実践になってしまった。

高校生と大学生との学び方の違い²¹

「高校時代までは、正しい答えを書かなくてはいけないことが求められた。そのためどうしても、抜き書きしたように正しい答えを書かなくてはいけない観念から抜けられないかもしれない。しかし間違えないでもらいたい。大学は、正しい知識を学ぶところではない。自分で考える習慣を身につけるところである。だから大切なのは、正しいかどうかではなく、自分でどんな論理を組み立てられるかである。そもそも『正しさ』などというものは、相対的・限定的でしかない。」

大学生のノートのとり方

<ノート40点>

1. ノートの表紙 4点
①自分の名前 ②講義科目名 ③教員名

④使い始めと終わりの年月日

2. 見出ページごとに見出しやテーマを 4点
3. 詰めて使うな！
 - 1) 左側のページ=感想文&講義レジュメ 4点
 - 2) 右側のページ=資料&自分の考え 28点
 - ①自分の「疑問点」をハッキリさせる
 - ②「調べたい・まとめたい・考えたい」を書く

よいレポートの書き方

<レポート20点>

良いレポートはサンドイッチだ

1. <結論>言いたいこと「主張」を最初の数行で述べる
2. 主張の「理由」を具体例で述べる
3. <結論>でまとめる（「主張」にもどる）
出された字数 = 4点。 主張 = 2点。
理由 = 2点。 結論 = 2点

※出された字数をまもる。形式は「である調」

以下は、具体的な指導内容である。

ノートのとり方については、1年次には1、2、3の1)までを徹底指導した。2年次は1年次に加えて、3の2)を重視して、点検した。この点検は前期に3度、ノート提出をさせた。6割の学生が2回目ではほぼ、1年次をクリアしたが、3の2)はなかなか進まなかった。それでも最終的には7割近くの学生が右側ページを使用していた。

残りの3割の学生には、右側には左ページを読んで、「ツイッター」的な発想で書き込めばよいと指導。ほぼ全員の学生が何らかの形で、余白を使うことができた。

1コマだけ、ノートの整理時間をとり、個別指導に当たった。右余白に何をかけばよいのか、学生は意外なところつまづいていることが対話を通じて発見した。大学でこのような時間を確保したのは初めてであった。学生の反応を紹介する。

「今日の授業はテストの説明と先生がくれた時間で大分ノートの整理ができました。後は右側のところを書くことも分かったし、テストの内容も分かったのがよかったです。先生は教職論を教えてください、私はその中で自分の意見を持つ事も大事ななと思った。先生はきちん〜と意見を持っているし、たくさんの意見を聞いて先生自体が生徒から学ぶこともあったと思います。私もそういう人になりたいと思いました」、また別の学生は「ノートのとり方って大事なんだなと思

ました。ただ黒板に書いてあるものをノートに写すのではなく、自分がその問題に感じた事、他の人の意見、いろいろな方向からの考えをどうとらえられるというのをノートに書くだけで頭にすーっと入るし、より学べるんやと思いました」と、ノートの必要性をとらえた学生は自習時間を確保した意味を理解した反応である。

しかし、つぎのような批判的な感想を書いた学生もいる。

「今日の授業の感想ですが、まず、今日の授業が授業と呼べるのかに疑問を感じています。正直、今日だけでなく今までの授業も、生徒にはあまり伝わっておらず何をしているかわからないという人も多いと思います。それは僕らのせいという見方もできますが、それだけが原因とも思えません。先生にどうしろというわけではありませんが、変えないといけないと思いました」と。

日頃からまじめな学生ではあったが、受身的に受講していたためか、急に「空白を…」と言われても何をすればよいのか分からないまま時間が経ったことが不満だったようである。「教育は否定されるところから始まるのだ」という先輩の名言があるが、気持ちがめいる場面であった。

教職論の講義は、従来の筆者の講義スタイルにはない方法を模索するというで始めたのである。教材をもとに、格闘する以外にはない。学生との信頼関係を土台に、一貫してあの手この手と必死になって対応してきた。プレイストーミングやランキングゲームなど教材に応じて、変化をもたせるよう工夫した。筆談ゲームも実験してみた。

筆談ゲームとは、一切しゃべらない。どうしても喋りたい時は筆談で。違反したら、その学生を見る。授業の最後にバツゲームをやってもらおうというルールであった。反発するかと思ったが、意外に面白がってゲームに参加し、静かな時間を確保できた。その時の感想である。

「…筆談ゲームをした時に森下先生の凄さを見れた気がしました。正直、私自身も授業態度が良いほうではないと思いますが、その私が楽しんで静かに授業を受けました。先生のゲームには全てに意図やねらいが定まっているなと思ったゲームでした。しかし、これからは私がねらいを定めゲームを作っていかなければなりません。感動ばかりしているではなく実行できるよ

う励んでいきたいと思います」。

過去に、少人数制での講義中、シーンとした教室の授業の雰囲気を見て、遅れてきた学生が、「こんな静かやったら、気分悪い。不安や」といっていたことがある。学生にとっては、少しざわついているほうが、安心できるのかなと感じたことがある。しかし、少なくとも、今受講している学生は、講義を静かに受けたという要求を持っていることは確かだ。筆談ゲームについて、次のような批判的な感想もあった。

「こんなゲーム形態を取り入れないと静かにすることが出来ない現実が嫌になりました。これも教職論で教師とはと学び考えなくてはならない私たちがこれではすごく不十分なことを思い知らされます。前回のレポートや感想文を読むとすごくいい考え方や思いがあるので一人ひとりがもう学生のままではいられないことを自覚して今日みたいな講義態度が出来てくれたらいいと思いました」と自分たちの受講態度の見直しを訴えている内容であった。

以上の試行錯誤と模索を通じて、ほとんど全ての学生がノートの右側の空白を利用し、今後の自由記述の発想に結びつくきっかけをつくることができたように思う。また、レポートについても7割以上の学生が、小論文のテーマに、自分の主張・結論を書くことができていた。前節のような感動体験をさせることは少なかった。

しかし、将来につながる自分で課題を持ってとりくむ方法に気づき、それなりに達成感をもった学生も少なくなかったように感じる。しかし、いろいろな場面で頭を打つことも多い実践であった。今後の機会に活かしていきたい。

第3節 納豆集団の発想に立った授業改善を

わが国の学力向上をめぐる教育改革、もっと正確に表現すれば、国民・子ども不在、人間の尊厳よりも資本・国家の利益に奉仕する教育を推進する教育政策の問題点を指摘してきた。高等教育機関の授業改善をはかるためのFD活動についても、学生の要求に沿った改革をめざして学内議論を推進してきた。

そのなかで、教員間の教育・学生観のとらえ方の違いや議論の不足など問題点が明らかになった。わが国の新自由主義と市場原理・学力テスト体制のなかで、本学の教育は、よく今日まで保育現場の協力も得ながら多くの卒業生を送り出してきた。その卒業生が現場で鍛えられ、リーダー的存在として成長している姿を

数多く見てきた。

昨年度、本学実践研究センターの20周年を記念し発行された研究大会誌²²は、多くの卒業生が実践を執筆していた。この実践・研究集は、専門性とはなにかを実践的に問う貴重な資料である。

この研究集には、人間を大切にする努力や悩みや喜びが溢れている。たとえば、4年目の保育士が専門学校で“納豆集団”²³という言葉を知り、納豆のように“ひとりひとりの個性を大事に子どもたち同士がつながっていける関係づくり”を大切にする保育実践の報告があった。

長年、施設で働いてきたベテラン保育士は、報告集のなかで、この仕事に不可欠なのは「丁寧な対話」であると言い切っている。悩んだ時に仲間や先生と気が済むまで語り合った。その中から、丁寧な対話の必要性に気づかせてくれた学校や仲間は宝と述べている。

今、大学では、保育現場から即戦力を求められている。即戦力養成に目が向きやすい。初代学長が人間を大切にする専門性をつけてほしい。2年間でだめなら、せめてその種だけは蒔いておいてほしいと言っていたという。また、秋葉も、「プロは結果を急がない。人間を大切にする努力や悩みや喜びで溢れている実践研究ぬきに、専門性をもった福祉労働者は育たない」という。そのことを教えてくれているのがこの実践研究集である。金沢工業大学ではないが、この報告集にある積み重ねられた実践の内容こそが、本学の「付加価値」を示す、大きな実績ではないだろうか。

秋葉が先に述べた「私語も生きる力かも」は名言である。また、宍戸が言った「私語だけを問題にしていると、学生の問題が見えないし、学生の主体的な学習が成長していかないのではないか」高浜前学長が「2年間で一人前にして卒業させれなかった時は、卒業後に開花する種だけは蒔いておいてくれ」という考え方のなかに、納豆集団の伝統がつくられつつあるようだ。

一人の教員だけで、本学だけでがんばるという考え方の危険については何度も指摘してきた。1つの授業も学生から見れば本学カリキュラムの1コマに過ぎない。学生を変えるには全学的な視野で、考えていかないと授業改善の展望も拓けない。また、本学だけでなく視野を広げて大きく実践を広げていけば、わが国の貧弱な教育政策のひどさを跳ね返し、学生にとって魅力ある大学となり、地域社会からも愛される、地域にとってなくてはならない存在となっていく可能性がある

る。今後の実践的・理論的模索を全学的に推進してもらいたい。

おわりに

非常に大きなテーマで小論を展開した。授業改善は生きた学生がおり、社会が常に変化している以上、これでよいという実践は存在しない。大切な事は実践をできるだけ共有することが今非常に求められていると考えられる。

フィラードと言えども今多くの問題と課題を抱えている。つまり、階級社会である以上、資本と労働者・国民とのせめぎあいである。われわれ福祉教育に携わる教職員がだれの立場にたって仕事を誠実に貫くかが問われている。

今回の小論では、私語をはじめとする授業改善の課題と民主的人格の形成と全面発達の要求とを関連付けて実践的検討を行なったつもりである。今後の大学における授業改善のために、ご批判をいただきたい。

脚注、引用文献、参考文献

1. 森下博、2009、「短大生に必要な基礎学力とは何か—人格形成の視点からの学力論を」、p.34、大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第8号
2. 同論文集、p.39
3. 平成21年度用「短期大学評価基準」、pp.23-24 財団法人短期大学基準協会
4. 児島邦宏、1991、『教師のパフォーマンス』、ぎょうせい、pp.172-174
5. 森下博、2011、「学生参加の必要性と民主的人格の形成—誰のための学校、教育、人格形成か」、p.34、大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第11号
6. 秋葉英則、2007、「私語は生きる力かも」『News Letter』第43号、日本青年心理学会事務局
7. 金子光夫、2011、「大学の講義で出来ることは何か—学生とのつながりを求めて」第61次大教組教研
8. 浜林正夫他、1995、「イギリスにおける労働者階級の状態」、pp.121-123、学習の友社
9. 清水貞夫・藤本文朗、2006年、キーワードブックス『障害児教育』、pp.36-137、クリエイツかもがわ
10. 小玉重夫、「学力調査の思想的文脈—新しい国家統制か、それとも福祉国家の再定義か」、第6章の7 結論、『研究所報』、Benesse教育研究開発センター
11. 矢川徳光、1976、『人格の発達と民主教育』、p.129、青木

書店

12. 斉藤浩志、「人間の発達とはなにか」、『教育実践事典 1』、pp.13-21 労働旬報社
13. 土屋基規、「社会体制と人間の発達」、『教育実践事典 1』、p.91、労働旬報社
14. 2008.1、「授業力アップの挑戦『授業研究』 21」 No.615、明治図書、2008.10、「授業力アップの挑戦『授業研究』 21」 No.624、明治図書
15. 庄井良信・中嶋博、2005、『フィンランドに学ぶ教育と学力』、p.107、明石書店
16. 15と同じ p.234、p.251-256
17. 15と同じ p.146-147
18. 健康福祉短期大学学生評価委員、2008、「授業改善アンケート」の「よい授業とは」集計結果
「①「わかりやすい」②「考えさせられる」③「楽しい」④「できないことができる」⑤「わからないことがわかる」⑥「自分の存在について考えることができる」⑦「発見がある」⑧「実習に役立つ」⑨「内容がためになる」⑩「将来役に立つ」⑪「人として成長できる」
19. 大村はま、1988、『教室に魅力を』、国土社
20. 岡本定男、2008、「FD他大学訪問調査」、pp.87-125、奈良教育大学FD委員会
FD活動の盛んな5つの大学を訪問した報告書の中で、一番筆者の印象に残った大学は金沢工業大学である。付加価値を問題にしていたからである。金沢大学（工学部）には勝てそうもない。では何で勝負できるか。それは入学した学生が卒業時にどれだけ力をつけたか、それを付加価値といっているのである。
21. 小笠原喜康、2002、『大学生のためのレポート・論文術』、講談社現代新書
22. ケアワーク実践・研究集No.1 2010、「実践は理論を築き 理論は豊かな実践を導く」 大阪健康福祉短期大学 附属福祉実践研究センター
23. 森上史朗・今井和子編、2000、「集団ってなんだろう」 p.4

Approaches to improving lectures and practical reviews of them from the viewpoint of overcoming meritocracy and promoting overall development

Hiroshi Morishita*

Abstract

I have published three treatises in the college bulletins: “A study conducted with the students in the seminar concerning how to cultivate basic learning ability” (in the 7th issue), “What is the basic learning ability required of students in junior colleges?” (in the 8th issue), and “The necessity of student participation and the formation of democratic personality” (in the 10th issue). Although I raised an issue concerning “Who do schools, education, and personality formation serve?” by titling the treatise in the 10th issue as such, I’ve left the following issue untouched on. It was to demonstrate the relations between overcoming meritocracy, and promoting overall development and the formation of democratic personality, among others. In this treatise, in addition to the theme, by referring to the written descriptions of the students’ impressions about my lectures I’ve tried to make a practical review of how I made use of the faculty development activity which I got involved in for three years, and how I was challenged to improve my lectures.

In the first chapter, I wrote about the arguments and consensus formation in the faculty, which might be indispensable for improving lectures. In the second chapter, I shed light on the problems of “educational reform” and “lecture improvement” being urged in Japan now, from the viewpoint of overcoming meritocracy and promoting overall development. In the third chapter, I reviewed my own practical approaches to improving lectures.

The notion of a “natto group,” which a graduate from my college referred to in the bulletin composed of practical research, might serve as a useful reference when we discuss how to improve lectures. I look forward to discussions by the faculty members and the students.

Key words: Meritocracy, overall development, dignity of human being, national achievement test, faculty development activity

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Hiroshi Morishita
〒590-0014 Tadeicho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education
E-mail: H.Morishita@kenko-fukushi.ac.jp

